

# 登録当時の調査

## 「千歳館」所見

明治13～14年頃、現在の山形市小白川町で魚問屋を営んでいた澤渡吉兵衛は、料亭「さわたりや」を創業し、明治44年に火災焼失した後、大正4年に二代目吉兵衛が現在地に再興して現在に至る。

敷地の西と南は道路に面し、主屋は敷地の中央西よりに西面して建つ木造2階建て南北棟、寄棟造りトタン葺きである。主屋の西面南端部から南側面にかけて下屋を巡らせ、主屋東南隅に木造2階建て客室棟が接続する。この2階建客室棟の東方、敷地東南隅に「つるの間」と、敷地東北隅に「ちとせの間」の離れ座敷を設け、主屋東側客室とともに庭園を囲む客室構成をもつ。

各建物の建設年代は、主屋は大正4年、つるの間は昭和2年、ちとせの間は昭和5年と伝え、2階建客室棟の年代は様式上、大正～昭和初年頃と推定される。主屋西南の下屋は昭和48年に増築して、現事務室にあったレストランを移し、主屋南側面下屋の旧カフェを厨房に改め、3年前に更に改装を加えているのが主な改造で、他にも若干の改装は認められるが概ね建設当初の形式を保っている。

主屋1階の平面は、中廊を境にして、西側を洋室として、中央ホールの北にラウンジ、南にレストラン（現事務所）を配し、東側に和風の客室を設ける。立面形式も西正面は洋風に造り、中央ポーチは間口3間庇の中央間を張出す形式とし、3間庇ポーチに対応して大屋根直下にも、モディリオンによる付庇を設けて、ファサードの意匠を巧みにまとめている。

主屋2階は東西に広縁、北に床の間・書院、南に舞台を設けた140畳敷の大広間として、3室に間仕切る。但し、西側立面は洋式として半間毎に柱を立て片開扉の窓を設けたために、内側に別に柱を立てて障子戸引違いとして、内側は和風に仕立てる2重壁構造とする。

主屋は京都大工の作と伝え、2階大広間の梁間5間持放しの架構技法や、欄間、建具などの洗練された洋式は、京都風を思わせる。

つるの間は、昭和2年に山形市立第一小学校で開催された全国産業博覧会の踊り舞台を移築したもので、小杉浩三の設計と伝える。床・棚・書院付きの12畳座敷で、北と西に広縁を設ける。座敷部分を入母屋造り、広縁を庇とするトタン葺き東西棟建物である。この座敷構えは、床・棚・書院の構成を保ちながら、その意匠は正規の木割に囚われない作者の自由奔放な創作意欲を感じさせる。

この建物は改造の痕跡はなく、舞台を移築したものとすれば、軸部構造材のみ採用して改造したものと考えられるが、技術的・様式的にも優れ、全国産業

博覧会による新時代の機運を反映したものとして評価できる。

ちとせの間は昭和5年の建設と伝え、創建の由緒は不明である。戦時中に戦災を避けるために解体され、昭和22～23年頃に復旧された。

10畳の前室と15畳の主室からなる東西棟、入母屋造り、棧瓦葺きで、座敷の東・南面の広縁と、西面の廊下をトタン葺き庇とし、西面廊下の西に風呂屋（現備品室・水屋）を設け、屋根は廊下と一体化した寄棟造り、トタン葺きとする。

主室北面に大床・平書院を備え、その西に天袋・地袋を備えた大柵と火燈窓を構える。火燈窓は東・南面の広庇両端間にも設けて外観を整えている。総檜木造りで、欄間や障子の組子は極めて繊細で、意匠的にも優れ、京都大工の作と伝える主屋以上の秀作であり、旧風呂屋も当初形式を保っている。

以上のように、千歳館の主屋・つるの間・ちとせの間は大正年間から昭和初期における日本の伝統的木造建築技法の高揚期を代表する地方の一例として、また、同時期の建設である旧山形県庁・議事堂などとともに、近代建築史を語る上で欠くことのできない建物である。

平成13年12月

東北芸術工科大学 宮本 長二郎